

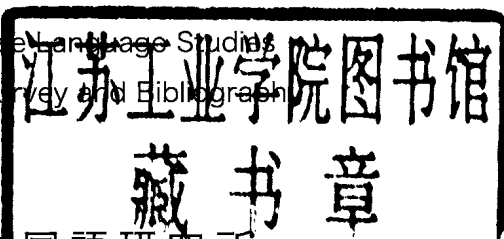
国語年鑑

2004年版

KOKUGO-NENKAN

2004

Japanese Language Studies
Annual Survey and Bibliography



国立国語研究所

The National Institute for Japanese Language

大日本図書

pub., DAINIPPON TOSHO

国語年鑑 2004年版

KOKUGO-NENKAN 2004

Japanese Language Studies : Annual Survey and Bibliography

2004年11月25日 印刷

2004年11月30日 発行

編者 国立国語研究所

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14

電話 (03) 3900-3111

発行者 大日本図書株式会社

代表者 佐藤 淳

印刷者 JTB印刷株式会社

代表者 青木 玲二

〒104-0061 東京都中央区銀座1-9-10

発行所 大日本図書株式会社

Tel. (03) 3561-8678 (編集)

(03) 3561-8679 (販売)

Fax. (03) 3561-3065

振替 00190-2-219

UDC (058) "55" 809.56 (平16-7)

NDC 810.5

ISBN4-477-01845-2

Printed in Japan

この年鑑を使う人のために

この年鑑は、2003年1月1日から12月31日までの国語関係資料に基づき、「動向」「文献」「名簿」「資料」の四部に分けて編集した。さらに索引を付した。また、付録CD-ROMを添付した。

〔第1部 動 向〕

日本語研究の動向や日本語をめぐる社会の動きを把握するための参考に供するため、第2部の目録を資料とした文献の動向、及び国立国語研究所の「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」を資料とした社会における動向について述べた。

〔第2部 文 献〕

1. 刊行図書及び雑誌文献は、分野別に掲載した。二つ以上の分野にかかわっている文献は、重出させることはせず、最も適当と思われる一分野の中に掲げた。
2. 各分野内を更に小分類し、◇を冠した中見出し、()で囲んだ小見出しを付した。
3. 2002年12月31日以前に発表され、前年版までに掲載されていない文献は「追補」として別に示した。
4. 収載漏れの文献について御連絡、御寄贈を頂ければ幸いである。
5. 採録した図書・雑誌の発行所一覧をそれぞれの項に続けて掲載した。
6. 「刊行図書」「雑誌文献」それぞれの利用上の注意は以下のとおりである。

《刊行図書》

- 二つ以上の分野にかかわっている図書のうち、論文集の形をとっている図書は、原則として以下のように分類した。

* 書名にある特定の分野名（又はその下の小分類名）がうたわれている場合は、他分野の論文が含まれていても、その分野に分類した。例：『国語語彙史の研究』→「語彙・用語」中の「◇語彙史」、『日本近代語研究』→「国語史」中の「◇上代語～現代語」

* 書名にある特定の分野名がうたわれていない場合（『〇〇大学創立△△周年記念論文集』など）、複数の分野名がうたわれている場合（『文法と音声』など）は、採録した論文のすべて又は大部分が同一分野の場合はその分野に、そう

でない場合は「国語（学）」の中の「◇論文集」に分類した。ただし史的研究で複數分野（「音韻史」「文字史」など）の論文が採録された場合は「国語史」に分類した。

- 定価は原則として本体価格を示したが、「追補」では発行時点の税込価格が示されている場合もある。

- 各文献内の記載は以下の順である。

題目番号・書名・外国語書名・（著編者）・発行所・（発売所）・発行年月・判型・総ページ数（「8,325.5」は、順に前付け・本文・後付けのページ数である）・定価
ただし欧文文献の場合は、

著編者：書名一出版地、出版者、発行年月、総ページ数、定価
の順である。適宜、解説、目次を付した。

- ＊印が付されている図書は、実物を見ることができなかったものである。収載漏れの図書と併せ、御寄贈いただければ幸いである。

《雑誌文献》

- 採録に当たっては、主として、国立国語研究所図書館所蔵の雑誌を調査対象とした。

- 原則として、4ページ以上のものを採録した。

- 各文献内の記載は以下の順である。

題目番号・題名・（筆者）・掲載雑誌名・巻号・発行年月・掲載ページ
ただし欧文文献の場合は、

筆者：題名・掲載雑誌名・巻号・発行年月・掲載ページ
の順である。

- 類似した雑誌名が存在する場合などを考慮して、掲載雑誌名に続く（ ）内に発行所を、〈 〉内に別名を記したものもある。「採録雑誌発行所一覧」をも併用・参照されたい。

- 7. 「総合雑誌／特集・連載・対談目録」では、2003年1月から12月までに出版された以下の10誌を対象として、日本語に関する内容を含む情報を一覧した。

『潮』『現代』『諸君!』『新潮45』『正論』『世界』『中央公論』『文芸春秋』

『Voice』『論座』（五十音順）

これらは朝日・毎日・読売などの一般紙朝夕刊に広告が掲載される月刊誌であり、一般にも広く読まれている。

[第3部 名 簿]

- 1. 国語関係者名簿、各学会・関係諸団体の一覧等を掲載した。国語関係者名簿は、国内・国外併せて約2400名を収めた。なお国語関係者名簿、各学会・関係諸団体

の一覧ともに、本年4～6月に行ったアンケート調査の結果に基づいている。

2. 国語関係者名簿には、本人の了解が得られた情報のみを記載した。なお本人から記載情報の更新に関する希望がなかった場合は、前年版と同じ情報を引き続き記載している。また調査終了後に生じた変更は、編集部に連絡があった場合に限り反映されている。

[第4部 資 料]

「これからの時代に求められる国語力について」「第2回 「外来語」言い換え提案」「第3回 「外来語」言い換え提案」「科学研究費等の交付状況」「受賞一覧」その他を収めた。「受賞一覧」には原則として2003年1月1日から12月31日までに発表されたものを収めた。

[索 引]

「文献」の部の刊行図書・雑誌論文について、それぞれ編著者名から文献番号によって検索できるようにした。

[付録CD-ROM]

巻末に、使い方及び著作権・利用条件について記した。

- この年鑑の編集は、伊藤雅光・新野直哉・斎藤達哉・熊谷康雄が担当し、竹部歩美が補佐した。

目 次

第1部 動 向

1. 刊行図書の動向	9
2. 雑誌文献の動向	15
3. 総合雑誌記事の傾向	22
4. 新聞記事に見る分野・話題の推移	28

第2部 文 献

刊行図書一覧	39
--------	----

国 語 (学)	40	マス・コミュニケーション	79
国 語 史	46	国 語 問 題	80
音 声・音 韻	48	国 語 教 育	82
文 字・表 記	50	外国人に対する日本語教育	90
語 彙・用 語	53	言 語 (学)	92
文 法	58	辞典・用語集	101
文 章・文 体	62	参 考 資 料	111
方 言・民 俗	64	国語研究資料	114
ことばと機械	70	(’04年版追補)	122
コミュニケーション	72		

採録図書発行所一覧	139
-----------	-----

雑誌文献一覧	155
--------	-----

国 語 (学)	156	語 彙・用 語	170
国 語 史	158	文 法	180
音 声・音 韻	163	文 章・文 体	193
文 字・表 記	166	古 典 の 注 釈	199

方 言・民 俗……………	204	外国人に対する日本語教育……………	256
ことばと機械……………	209	言 語 (学)……………	267
コミュニケーション……………	213	参 考 資 料……………	280
マス・コミュニケーション……………	225	書 評・紹 介……………	281
国 語 問 題……………	227	(’04年版追補) ……………	288
国 語 教 育……………	230		
採録雑誌発行所一覧……………			305
総合雑誌／特集・連載・対談目録……………			337

第3部 名 簿

1. 国語関係者名簿 ……………	345
2. 各学会・関係諸団体一覧 ……………	528
3. 学術団体・審議会等における関係者氏名 ……………	539

第4部 資 料

これからの時代に求められる国語力について（文化審議会答申） ……	543
第2回 「外来語」言い換え提案 ……………	593
第3回 「外来語」言い換え提案 ……………	623
平成15年度科学研究費等の交付状況 ……………	649
受賞一覧(関係学会賞など) ……………	694
『国語年鑑』所収「資料」一覧 ……………	698
索 引(刊行図書・雑誌文献著編者名) ……………	705
[付録CD-ROM]	
使 い 方……………	735

第 1 部

動 向



刊行図書の動向

はじめに

『国語年鑑』では昨年刊行の2003年版から「第1部 動向」の掲載を開始した。その中で刊行図書については、1993年から2002年までの10年間に刊行された図書のデータを表にまとめて掲げ、動向の概観と変化の傾向の分析を行った（新野・斎藤2003。以下「前稿」とする）。今回も、過去10年分のデータということで、1995年版から本2004年版までに掲載された、1994年から2003年までの10年間に刊行された図書のデータを表1に示した。前稿同様、現行の分野を更にA群（中核的領域）・B群（関連領域）に二分した。また各年版の「追補」収録の図書（2004年版を例に取れば、2002年12月31日以前に刊行された図書）はそれぞれの刊行年の数値に加算し、集計した。

1. 2004年版での追補

まず、前回掲載したデータに今回追加された文献数（つまり、この2004年版の「追補」に掲載された分ということになる）を表2に示した。前稿で述べたように、新刊書が刊行されてから担当者がその情報に接するまでには時間差が生じることが避けられず、2002年に刊行された図書で翌2003年版の原稿作成に間に合わなかった分は続く2004年版以降の「追補」に収められることとなる。

表2を見ると、2001年刊までの文献数はわずかで、2002年刊の文献だけで全体の約86%と大部分を占めている。2003年版に掲載された2002年刊行の図書は953件で、今回それに2割増補したことになる。

分野別に見ると、A群では〔語彙・用語〕〔方言・民俗〕、B群では〔国語教育〕〔国語研究資料〕〔辞典・用語集〕〔コミュニケーション〕〔言語学〕が目立つ。これらはそもそも掲載数の多い（つまり刊行される図書の数の多い）分野であり、したがって追補される数も多くなる。またこれも前稿で指摘したが、科学研究費等のプロジェクトの報告書や私家版・自主制作といった商業ルートに乗らない図書は情報を入手しにくく、刊行後年鑑掲載までの時間差が特に生じやすい。〔方言・民俗〕は特にそのような図書が多いのである。

2. 2002年（追補後）を概観する

さて前稿では過去10年間のデータに基づき、動向の概観と変化の傾向の分析を試みた。今回の表1は、前稿のデータのうち最も古い1993年のものが削られ、代わって表2のデータ（1988年の1件を除く）と2003年のデータが追加された、という変化にとどまり、1994～2001

表1 1994～2003年の刊行図書文献数

年	分 野	(文献数 単位: 件)										分類別 合計										
		1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	文献数	%									
国語史	国語史	22	1.4	26	1.5	32	1.5	20	1.2	25	1.9	28	2.2	23	1.8	25	2.0	28	2.4	18	1.8	247
	音声・音韻	5	0.3	15	0.9	11	0.5	17	1.1	10	0.8	6	0.5	5	0.4	6	0.5	6	0.5	12	1.2	93
	文字・表記	29	1.9	33	1.9	32	1.5	33	2.0	24	1.8	28	2.2	30	2.4	25	2.0	24	2.1	34	3.4	292
	A 語彙・用語	53	3.4	74	4.3	79	3.8	103	6.4	75	5.7	64	5.0	61	4.9	61	4.8	74	6.3	54	5.4	698
	文法	30	1.9	29	1.7	26	1.3	27	1.7	15	1.1	14	1.1	23	1.8	21	1.7	35	3.0	34	3.4	254
国語(学)	文章・文体	18	1.2	19	1.1	19	0.9	28	1.7	19	1.4	20	1.6	25	2.0	13	1.0	21	1.8	19	1.9	201
	方言・民俗	92	5.9	89	5.1	117	5.7	109	6.7	102	7.8	112	8.8	96	7.7	83	6.6	97	8.3	68	6.9	965
	A 総合計	249	15.9	285	16.5	316	15.3	337	20.8	270	20.6	272	21.3	263	21.1	234	18.6	285	24.4	239	24.1	2750
	国語(学)	35	2.2	63	3.6	59	2.9	50	3.1	45	3.4	61	4.8	55	4.4	56	4.4	48	4.1	55	5.5	527
	ことばと機械	9	0.6	16	0.9	19	0.9	21	1.3	19	1.4	14	1.1	15	1.2	12	1.0	5	0.4	15	1.5	145
コミュニケーション	コミュニケーション	184	11.8	182	10.5	179	8.7	114	7.1	60	4.6	90	7.1	79	6.3	86	6.8	103	8.8	92	9.3	1169
	マス・コミュニケーション	6	0.4	8	0.5	15	0.7	7	0.4	2	0.2	6	0.5	2	0.2	3	0.2	2	0.2	4	0.4	55
	国語問題	3	0.2	8	0.5	8	0.4	11	0.7	12	0.9	18	1.4	23	1.8	22	1.7	18	1.5	15	1.5	138
	国語教育	151	9.7	141	8.2	214	10.4	166	10.3	124	9.5	117	9.2	112	9.0	136	10.8	140	12.0	135	13.6	1436
	外国人に対する日本語教育	21	1.3	38	2.2	51	2.5	29	1.8	29	2.2	18	1.4	20	1.6	23	1.8	35	3.0	14	1.4	278
国語研究資料	国語(学)	105	6.7	109	6.3	119	5.8	114	7.1	98	7.5	76	6.0	96	7.7	95	7.5	82	7.0	103	10.4	997
	辞典・用語集	330	21.1	317	18.3	498	24.1	386	23.9	296	22.6	267	20.9	245	19.7	249	19.8	227	19.5	165	16.6	2980
	参考資料	51	3.3	55	3.2	81	3.9	51	3.2	39	3.0	48	3.8	53	4.3	43	3.4	38	3.3	40	4.0	499
	国語研究資料	420	26.9	507	29.3	508	24.6	331	20.5	318	24.2	288	22.6	283	22.7	301	23.9	183	15.7	114	11.5	3253
	B 総合計	1315	84.1	1444	83.5	1751	84.7	1280	79.2	1042	79.4	1003	78.7	983	78.9	1026	81.4	881	75.6	752	75.9	11477
年別合計		1564	100	1729	100	2067	100	1617	100	1312	100	1275	100	1246	100	1260	100	1166	100	991	100	14227

表2 2004年版追補刊行図書文献の発行年

(単位: 件)

分野	1988年	1996年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	分野別合計
A群	国語史					3	7	10
	音声・音韻							0
	文字・表記						4	4
	語彙・用語					1	22	23
	文法						5	5
	文章・文体						6	6
	方言・民俗	1			1	6	22	30
	A群合計	1	0	0	0	1	10	78
B群	国語(学)					1	4	5
	ことばと機械				1			2
	コミュニケーション					2	18	20
	マス・コミュニケーション							0
	国語問題					1	2	4
	国語教育					1	46	47
	外国人に対する日本語教育			1	1	1	3	6
	言語(学)						16	16
	辞典・用語集					2	26	28
	参考資料						1	1
	国語研究資料		6	1		1	32	40
	B群合計	0	6	1	2	3	10	147
	年別合計	1	6	1	2	4	213	247

年の数値には大きな変化はない。したがってこの間の動向については今回再度分析を試みるには及ばないと言える。しかし前述の通り2割強の増補がなされた2002年のデータからは、前稿では見られなかった傾向が見いだせた。

まず「中核的領域」では、2001年まで減少傾向にあった〔語彙・用語〕、横ばい傾向にあった〔文法〕がいずれも2002年にはやや大きな伸びを見せている。前者については人名・地名に関する図書のデータが今回増補されたのが大きい。このテーマの図書には、中央で出版されたものに比べ刊行情報の把握が遅れがちな地方出版のものが少なくないのである。また「関連領域」では〔コミュニケーション〕がやや大きく伸びている。これには、後述のようなこの年の「日本語本（日本語について述べた、一般向けの本）ブーム」の影響が指摘できよう。一方〔国語研究資料〕はかなり数値が下がっている。主な資料はひとわり刊行されてしまったということか、あるいは「日本語本ブーム」の恩恵にはあずかりにくい分野ゆえに採算上の事由で出版が控えられていると見るべきか。

3. 2003年に目立ったことは

ここでは、2004年版に掲載された2003年発行の図書データ（なお第1章に述べたように、それは今後の増補が予想される）を概観して、特徴的と思われることを指摘してみる。

2002年の出版界は「日本語本ブーム」が大きな話題となった。出版ニュース社が発表した同年の「出版・読書界10大ニュース」の第3位に、〔日本語本ブーム、ベストセラー相次

ぐ。英語本も〕が入っている。

しかしこのブームも、2003年にはひとまず落ち着いたと言える、年間ベストセラーの中に日本語関係の本は顔を見せていない。しかし、一般向けの体裁をとりながら専門書としての優れた価値も有した著作が多く刊行された。金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店・1月）、山田俊雄『日本のことばと古辞書』（三省堂・5月）、馬瀬良雄『信州のことば 21世紀への文化遺産』（信濃毎日新聞社・6月）などがそれである。新書版では、山崎紀美子『日本語基礎講座 三上文法入門』（ちくま新書・4月）、井上史雄『日本語は年速一キロで動く』（講談社現代新書・7月）、屋名池誠『横書き登場 日本語表記の近代』（岩波新書・11月）などがある。

「日本語本」をもう少し見てみよう。白川静の90歳を超えての活躍もあって漢字を扱った「日本語本」が目立つ。この分野ではここ数年阿辻哲次が一般雑誌に連載を持つなど精力的に活動している。また地名に関する図書も近年多く出ているが、その背景には「平成の大合併」の名の下に市町村の合併が相次ぎ、その影響もあって次々と旧来の地名が消え新たな地名が生まれていることがある。旧来の地名を多少のノスタルジーをこめて記録しておこうというものが多い中、それにとどまらず新地名を批判的に論じた楠原佑介『こんな市名はもういらない！ 歴史的・伝統的地名保存マニュアル』（東京堂出版・4月）のような図書もある。

新聞・放送といったマスコミ関係者の手になる「日本語本」も少なくない。新聞関係では、①読売新聞日本語企画班『新日本語の現場』（中央公論新社・2月）、②読売新聞校閲部『日本語「日めくり」一日一語』（中央公論新社・6月）、③毎日新聞校閲部『読めば読むほど 日本語、こっそり誇れる強くなる』（東京書籍・6月）などで、いずれも新聞連載をまとめたものである。放送関係では④道浦俊彦『「ことばの雑学」放送局 「新語・造語・迷用法」をアナウンサーが楽しく解説』（PHP研究所・5月）、⑤NHK放送文化研究所日本語プロジェクト『国語力アップ400問』（日本放送出版協会・5月）、⑥梶原しげる『口のきき方』（新潮社・9月）などが見られた。実用的な「日本語知識」を提示するもの（②⑤）、日常生活で接する日本語の様々な新しい現象・傾向について、当否の判断よりもまず実情の紹介に重点が置かれているもの（①③④）、新しい現象・傾向を「乱れ」ととらえて批判的に論じ、「本来の」姿を提示しようとする性格が濃いもの（⑥）に大きく立場は分かれる。

次に分野別に見てみよう。文法では、岩下裕一『「意味」の国語学 松下文法と時枝文法』（おうふう・1月）、『三尾砂著作集』1・2（ひつじ書房・4、7月）、そして前掲の『日本語基礎講座 三上文法入門』などのような、現代文法研究の足跡をたどる図書が多く見られる（『日本語基礎講座～』以外にも、生誕100年を迎えた三上章に関する一連の著作が刊行された）。2002年に続いてこの分野の図書数が増加傾向にあるのもそのような思潮によるものか。

一方言語学の分野でも、鬼界彰夫『ウィトゲンシュタインはこう考えた 哲学的思考の

全軌跡1912-1951』(講談社現代新書・7月), 町田健『コトバの謎解き ソシユール入門』(光文社新書・8月)といった, 現代言語学に大きな影響を与えた巨星を取り上げた一般向け新書が刊行されている。なおソシユールについての図書は2004年に入ってから相次いでいる。

また後半には山口翼『日本語大シソーラス 類語検索大辞典』(大修館書店・9月), 米川明彦『日本俗語大辞典』(東京堂出版・11月), 山口仲美『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』(講談社・11月)といった長年の研究成果に基づく特徴ある辞典が次々と刊行され, 一般紙・誌の書評でも取り上げられるなど話題になった。

その一方で, 国語辞典については, 大規模な広告を伴う創刊や, 既存著名辞典の改版といった話題には恵まれない一年であった。

最後に, シリーズものに触れる。朝倉書店は2002年刊行開始の『朝倉日本語講座』(2003年中には5冊を刊行)に続き, 10月には『朝倉漢字講座』の刊行を開始した。また7月には『シリーズ認知言語学入門』(大修館書店), 11月には『現代日本語文法』(くろしお出版)も刊行を開始した。個人著作集では前掲の『三尾砂著作集』がある。また『金田一春彦著作集』(玉川大学出版部)が11月に刊行を開始し, その後隔月で刊行が進んでいるが, 第4回配本が刊行された2004年5月に金田一はこの世を去った。

更に文部科学省の特定領域研究である「環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究」の成果報告書は2001年以降次々と公開されており, 2003年も日本語関係のもので12冊を数えている。ほかにも呉人恵『危機言語を救え! ツンドラで滅びゆく言語と向き合う』(大修館書店・6月), 津曲敏郎『北のことばフィールド・ノート 18の言語と文化』(北海道大学図書刊行会・10月)など, 危機言語の保護について論じた図書が目立った。それだけ状況が切迫しているということであろう。

4. 書名に見る「日本語本ブーム」

続いて, 表1の図書について, 分野とは別の観点から, ひとつの概観を行ってみたい。過去5年1999~2003年に刊行された図書のタイトル(副書名は除く)で, 「日本語」「国語」「言語」「言葉」といった術語がどのくらい使われているかを調べてみた。結果は表3である。「日本語」を例に挙げて数字の出し方を説明すると, 「日本語学」「日本語史」「日本語教育」「日本語音声」といった複合語の数値も含んでいる。なお「国語」に関しては教科名の場合も含み, 「外国語」「中(韓)国語」「〇カ国語」のようなものは除いている。また「言語」では「方言語集」「方言語法」のようなものは除いている。いずれも漢字表記・ひらがな表記・カタカナ表記(及びそれらの組合せ)に分けて集計し, 5年間を通じて該当する図書が0の項目は削っている。

2002年に「日本語」が前年比1.5倍以上に急増しているのは, この年の「日本語本ブーム」

表3 書名に「日本語」等を含む刊行図書文献数

(単位: 件)

	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	術語別合計
日本語	103	115	110	171	123	622
にほんご	1	0	0	0	0	1
ニホン語	0	2	0	0	0	2
小計	104	117	110	171	123	625
国語	55	54	81	98	77	365
こくご	1	0	0	0	0	1
小計	56	54	81	98	77	366
言語	61	54	65	77	55	312
言葉	18	23	15	16	19	91
ことば	62	49	57	43	60	271
コトバ	1	0	3	0	0	4
小計	81	72	75	59	79	366

の現れといえよう。この年には「国語」「言語」も前年より伸びている。しかし「言葉」・「ことば」はトータルではむしろ減っており、1年遅れて2003年になって増加している。更に細かく見ていくと、ブームの火付け役である斎藤孝『声に出して読みたい日本語』(草思社・パート1は2001年9月、同2は翌年8月刊)の影響の大きさがうかがえる。

書名の末尾に「日本語」がつく図書(『日本語』という書名のものは除く)の数は1999年が5、2000年が6、2001年には9だったものが、2002年には一気に33へと増えているのである(ただし2003年には13に減っている)。そして『～たい日本語』という書名は1993～2000年には全くなく、2001年にも『声に出して～』1冊のみなのに対し、2002・2003年には3冊ずつ(ほかに2002年には『～たい美しい日本語』・『～たくない日本語』が2冊ずつ)見られるのである。

なお「国語」はブームに先立つ2001年に既に大きく伸びている。これは、表1からも分かるように「国語教育」の図書が多くなった(2002年度からの小中学校新指導要領の導入が要因と思われる)ことによるところが大きい。また『日本国語大辞典』第二版が計11巻刊行されたことも数値の伸びに影響している。

以上、刊行図書のデータに基づき動向の分析を行った。

(文中敬称略)

参考文献

新野直哉・斎藤達哉(2003)「刊行図書の動向」『国語年鑑2003年版』, 9-14, 国立国語研究所編, 大日本図書

(新野直哉)